

# コロナ禍において児童が考える理想の友達関係に特化した 教育支援プログラムの開発 -ピア・サポートの視点から-

戸梶 良輝<sup>1)</sup>, 岡田 倫代<sup>2)</sup>, 古口 高志<sup>2)</sup>

1) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻 院生

2) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻

## Development of Support Program on Images of Desirable Relationship for Elementary School Children during the COVID-19 Pandemic - From the Viewpoint of Peer Support -

TOKAJI Yoshiki<sup>1)</sup>, OKADA Michiyo<sup>2)</sup>, KOGUCHI Takashi<sup>2)</sup>

1) Program for Advanced Professional Development in Teacher Education  
Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University, Graduate student

2) Program for Advanced Professional Development in Teacher Education  
Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University

### 要 約

本研究の目的は、児童が考える理想の友達関係を把握し、それに特化した教育支援プログラムを開発することである。まず、理想の友達関係の要素について記述式アンケートを階層的クラスター分析で検討した結果、「仲の良さ」「ケンカの未然防止と修復」「他者理解」「協力・助け合い」「親密さ」及び「相談・自己開示」が抽出された。次に、それに基づいて全3回の教育支援プログラムを開発・実施した。共起ネットワーク図で分析した結果、第1回では「分かる」「理解」「しぐさ」及び「見た目」が、第2回では「分かる」「思う」及び「自分」が、第3回では「言葉」「分かる」「理由」「言う」及び「相手」などの語が中心的な語として抽出された。従って、児童は「何でも言い合いながら助け合い、ケンカがあっても友達の気持ちを理解して親密な関係でいられること」を理想の友達関係と考えており、実施した教育支援プログラムは、友達関係を構築する上で必要なスキルについての知識理解を促進すると考えられた。

**キーワード：**友人関係，不登校予防，ピア・サポート，テキストマイニング，コロナ禍

### I. 目的

現在、不登校などの生徒指導上の諸課題が深刻化しており、その早期発見・早期解決が喫緊の課題となっている。不登校に関して、令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（文部科学省，2020）では、不登校児童生徒数が181,272人で過去最多を記録しており、不登校は増加の一途をたどっている。不登校に至る要因としては様々なものが考えられるが、先の調査結果によると、「学校に係る状況」の中で不登校の要因として最も高い割合を示しているのは、小学校及び中学校ともに「いじめを除く友人関係をめぐらる問題」となっている。石川ら（2012）は、不登校児童生徒が不登校になったきっかけとして、「友達との関係」や「先生との関係」が多いことを示しており、長根（1991）は、小学4年生から6年生において学校生活のストレス要因で最も多いのが友人関係であると述べている。

また、近年は新型コロナウイルス感染症の流行に

より、多くの学校現場が臨時休校措置をとり、子どもたちは学習や運動の機会だけでなく、友達と関わる機会が奪われた経緯がある。国立成育医療センター（2021a, b）によると、コロナ禍においても、子どもたちの悩みは「勉強のこと」に次いで「友だち関係のこと」が多いことや、「学校でしゃべるとクラスの子が注意してきとうざい」などの記述があることを示しており、友達関係をめぐらる問題は依然として存在していることが考えられる。さらに、「コロナになった人とは治っても遊びたくない」と回答している子どもが22%程度いること（国立成育医療センター，2021b）も示されており、コロナ禍における友達関係では、コロナウイルスへの不安や恐怖から生まれる偏見や差別によるトラブルも今後増えてくることが予想される。また、こころの状態を問うアンケート調査において、小学生以上の子どもによる回答では、「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」が42%、「すぐにイライラする」が37%、「最近、集中できない」が32%の割合を占め、全体の76%に何らかのストレス反応・症状がみられたとの

報告（国立成育医療センター，2021a）があり，それによる不登校児童生徒数の増加も予想される。このようなことから，不登校の早期発見・早期解決について考える際は，児童間の友達関係は無視できないものであると推察され，コロナ禍の友達関係にこそ焦点を当て，コロナ禍であっても，彼らにとっての望ましい友達関係を構築する必要があると考える。

しかし，「望ましい友達関係」とは，どのような関係なのだろうか。戸梶ら（2021）は，「望ましい友達関係」の要素として，「共有様式」，「自己開示」，「安心感」，「自己理解」，「自尊感情」，及び「親密性」を，「望ましくない友達関係」の要素として，「メンタルヘルス」，「不安・不満」，「同調ストレス」及び「群れ」をあげている。しかし，これらの要素はすべて友達関係を扱った論文の要旨の記述を分析にかけて抽出したものであるため，小学生児童の友達に関する考えを十分に考慮できているものとは言い難い。そのため，実際にコロナ禍における児童が考える理想の友達関係を把握して，それに特化した介入を考える必要があるだろう。

では，児童が考える理想の友達関係を構築するためには，どのような方法で介入すればよいのだろうか。本研究では，児童同士がお互いを支え合うピア・サポートに着目することにした。ピア・サポートは，悩みがある時に子どもは友達に相談することが最も多い（コール，2003）という実態から開発された理論であり，様々な定義があるが，岡田（2017）によるとピア・サポートは「仲間を支援する，支える活動である」とされている。ピア・サポートは，これまで数多くの学校現場で実践されており，成果を上げている（中野ら，2004，春日井ら，2011）。例えば，小学校においては，ピア・サポートを導入することの成果として，サポーターになった児童から「他の人の役に立てた」「少し優しくなったような気がする」及び「小さい子に好かれてきたような気がする」などの肯定的な記述が見られ，支援活動を受けたと感じている児童が約9%（中でも1年生は21%）で，サポーターになって活動してみたいと思っている児童が51%いたとの報告（中野ら，2004）もある。

このことから，ピア・サポートの視点を取り入れた教育支援プログラムを開発することにより，望ましい友達関係の構築を図ることができると考える。

表1 教育支援プログラムの構成

実施項目	目的	内容
ノンバーバルコミュニケーションから気持ちを読み取る	相手の表情や身振り，口調（ノンバーバルコミュニケーション）などから気持ちを考えるを通して，相手の気持ちを意識できるようにする。	メラビアン法の法則からノンバーバルの重要性を捉えさせ，表情（マスクから出ている部分）や身振り，セリフを用いてある気持ちを表現し，友達がどんな気持ちなのかを当てるゲームを行う。
アイメッセージで気持ちを伝えよう	アイメッセージとユーメッセージについて理解することを通して，アイメッセージを使って自分の気持ちを伝えることができるようにする。	アイメッセージとユーメッセージをそれぞれ提示し，2つの言い方の違いから特徴を捉えさせ，ワークシートを用いて，ユーメッセージをアイメッセージに直す活動を行う。
素敵な頼み方・断り方	素敵な頼み方と断り方のポイントを考えさせるを通して，相手の気持ちを考えた頼み方と断り方をできるようにする。	頼み方と断り方をそれぞれ3種類の言い方で示し，その違いから素敵な頼み方と断り方のポイントを見つける活動を行う。

また，8歳半から12歳頃は，友達が親と同等かそれ以上に重要となり，同性同年輩の親密な一対一の友人関係が現れるとされている（Sullivan，1953）時期でもある。友達の重要性が高まっていく時期に，仲間を支援する，支える活動であるピア・サポートを実践することは，子どものニーズに応じた介入であると考えられるだろう。

以上より，本研究は，コロナ禍において児童が考える理想の友達関係を把握し，ピア・サポートの視点からそこに特化した教育支援プログラムを開発し，その効果を検討することを目的とした。

## II. 方法

### 1. 調査時期及び調査対象

2021年6月から10月までを調査時期とし，公立小学校に在籍する5年生の3クラスの児童75名を対象に調査を実施した。回答が得られた児童74名（男子37名，女子37名）を分析対象とした（有効回答率98.6%）。

### 2. 調査内容

#### （1）事前アンケート

望ましい友達関係について考える際，どのような友達関係が望ましいかについては児童の言葉から得ることが必要であると考えられたため，事前アンケートとして「理想の友達関係に関する記述式アンケート」を自作した。質問項目は「あなたにとって，理想の友達関係とは，どんな関係だと思いますか。自由に書いてください」とした。アンケート調査及び回収は，各学級担任が実施した。

#### （2）事後アンケート

教育支援プログラムの効果を検討するために，教育支援プログラム実施後に，振り返りシートとして事後記述式アンケートを実施した。質問項目は，「今日の授業の感想を自由に書いてください」とした。アンケート調査及び回収は，筆者及び各学級担任が実施した。

### 3. 教育支援プログラムの内容

事前アンケート結果，及びピア・サポートの理論（岡田，2017，森川・菱田，2002）を基に，教育支援プログラムを3回構成で考案した（表1）。

第1回では、相互理解を促すために、主にノンバーバルコミュニケーションから友達の気持ちを読み取る内容を設定した。新型コロナウイルス感染症の流行により、児童は学校生活の中でも常時マスクを着用することが求められている。お互いの表情が見えないため、そこから友達の気持ちを考えることが難しくなることが予想された。したがって、表情以外にも、見た目やしぐさ、視線、声の高低、速さ、大きさ、及びテンポなどのノンバーバルな部分に着目させ、マスクをして表情の大部分が分からなくても、友達の気持ちをノンバーバルコミュニケーションの視点から読み取れるようにさせたいと考えた。なお、プログラムの中では、表情についても扱うが、目や眉毛などマスクから出ている部分にも着目させることとした。

第2回では、相互理解をさらに深めるために、アイメッセージとユーメッセージについて扱う内容を設定した。第1回では、見た目やしぐさなどのノンバーバルコミュニケーション、すなわち非言語の部分に着目して内容を設定したが、友達の気持ちは、基本的に言葉で伝えないと分かりづらい、読み取りづらいということが前提にあると考えられる。そのため、友達の気持ちをノンバーバルコミュニケーションの視点から読み取れるようにすることに加え、アイメッセージとユーメッセージを扱うことにより、自分の気持ちを言葉で適切に伝えるスキルの向上を目指すことを目的に設定した。

第3回では、相互理解及び実際の友達支援に関連する素敵な頼み方と断り方について扱う内容を設定した。第2回でアイメッセージとユーメッセージについて扱い、友達の気持ちを考えた伝え方ができるように働きかけるが、学校生活の中で友達の気持ちを考えた伝え方を使える具体的な場面の設定こそが重要であると考えた。特に、友達に自分の要求について頼み事をしたり、友達の要求を断ったりする場面は、比較的好くみられる場面だった。そのため、素敵な頼み方や断り方におけるポイントを理解させることにより、そのポイントを意識した頼み方と断り方を実践させ、友達の気持ちを的確に推測し、相手を尊重した伝え方ができるようにしたいと考えた。

教育支援プログラムは3回とも学級活動の時間に実施し、基本的にマイクロソフト社のパワーポイントを使用し、視覚化を図りながら実施した。なお、全3回の教育支援プログラムを行う際は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、授業中は常に換気を行い、児童には常時マスクの着用を義務付けること、ペアやグループ活動は長時間行わないこと、ペアやグループ活動時は、机を離してお互いに一定の距離を保つことなどのルールを遵守しながら実施するように留意した。

#### 4. 解析方法

事前アンケート及び事後アンケートをテキストマイニングの手法を用いて分析した。分析には、フリーソフトウェアのKH coderを用いた。テキストマイニングとは、膨大なテキスト（文書）情報の中

から有用な情報を掘り出す（マイニング）ことで、定型化されていないテキストデータを、一定のルールに従って定型化して整理し、データマイニングの手法を用いながら、相関関係などの定量分析を行う手法（齋藤、2011）である。

本研究におけるテキストマイニングの手順として、事前アンケートに関しては、得られた記述をマイクロソフト Excel で電子化し、KH coder に Excel データを入れ、階層的クラスタ分析を用いて、児童が考える理想の友達関係の要素を分類した。

事後アンケートについても同様の手続きを行い、KH coder に Excel データを入れ、共起ネットワーク図を用い、中心的な語を抽出した。なお、小学5年生では授業中の学習課題で提示した語を振り返りシートに記述する可能性が考えられたため、より精緻な分析をするため、授業の中で学習課題に提示した語は「使用しない語」として指定し、分析の対象から除外した。「使用しない語」として除外した語は、「友達」「表情」「身振り」「口調」「気持ち」「考える」「読み取る」「場面」「伝え方」「相手」「アイメッセージ」「ユーメッセージ」「頼み方」「断り方」及び「ポイント」であった。

#### 5. 倫理的配慮

本研究は、調査対象校の校長及び教頭に研究の趣旨を説明し、当該の教職員の同意を得て実施した。また、本研究で使用した事前アンケート及び事後アンケートは記名式を採用したが、回答に不備がある場合や提出がない場合、再提出を求めることはしなかった。つまり、調査に賛同しない場合、回答しない、無記名、提出しないという選択肢をとることが可能となるようにした。

### III. 結果

#### 1. 事前アンケートについて

「理想の友達関係に関するアンケート」で得られた記述を階層的クラスタ分析で分析した結果、6のクラスターが抽出された（図1）。

第1クラスターは「良い」、「仲」で構成され、要素名を「仲の良さ」と解釈した。

第2クラスターは「ケンカ」、「仲良く」、「仲直り」、「言える」、「一緒」、「楽しい」、「友達」、「優しい」、及び「遊ぶ」などで構成され、要素名を「ケンカの未然防止と修復」と解釈した。

第3クラスターは「お互い」、「分かる」、「相手」、及び「気持ち」で構成され、要素名を「他者理解」と解釈した。

第4クラスターは「困る」、「助ける」、「協力」、「考える」、及び「教える」で構成され、要素名を「協力・助け合い」と解釈した。

第5クラスターは「話」、「合う」、「仲間はずれ」、及び「仲良い」で構成され、要素名を「親密さ」と解釈した。

第6クラスターは「悪口」、「頼る」、「自分」、「注意」、「言う」、「合える」、「相談」、及び「聞く」で構成され、要素名を「相談・自己開示」と解釈した。

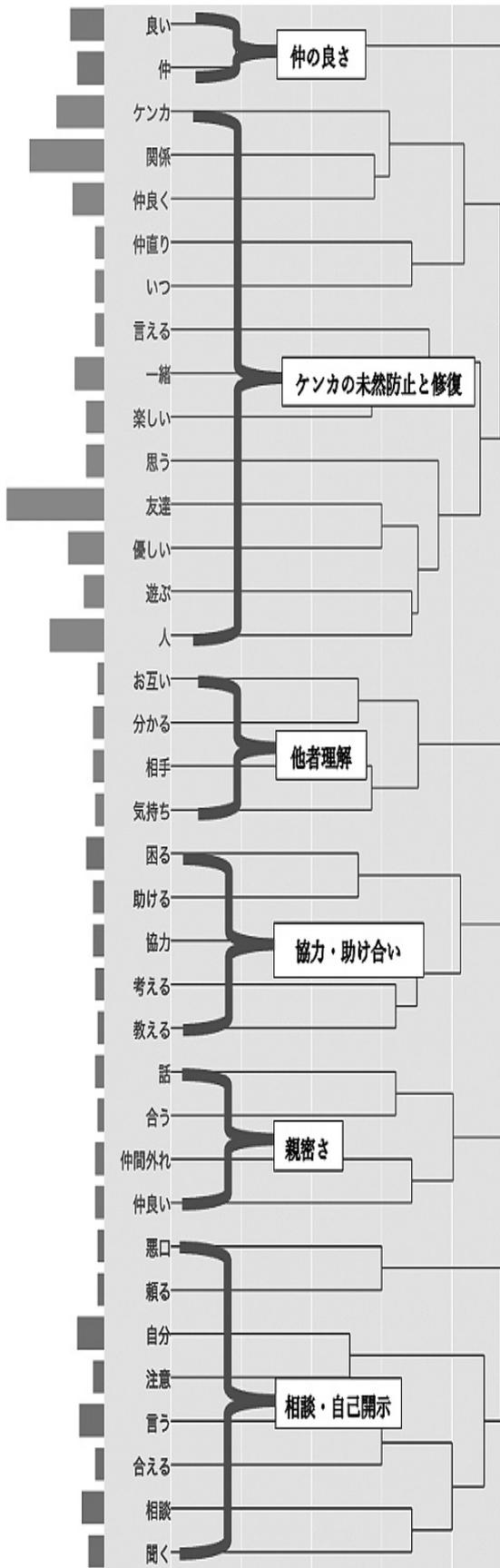


図2 理想の友達関係における階層的クラスター分析結果

## 2. 事後アンケートについて

教育支援プログラム実施後の振り返りシートで得られた記述を、第1回、第2回、及び第3回、それぞれ共起ネットワーク図を用いて分析した結果、第1回では、「分かる」、「理解」、「しぐさ」、及び「見た目」などの語が中心的な語として抽出された(図2)。

第2回では、「分かる」、「思う」、及び「自分」などの語が中心的な語として抽出された(図3)。

第3回では、「言葉」、「分かる」、「理由」、「言う」、及び「相手」などの語が中心的な語として抽出された(図4)。

## IV. 考察

### 1. 事前アンケート調査結果から見える児童が考える理想の友達関係について

「理想の友達関係に関するアンケート」で得られた記述を階層的クラスター分析で分析した結果、6のクラスター(仲の良さ、ケンカの未然防止と修復、他者理解、協力・助け合い、親密さ、相談・自己開示)が抽出された。戸梶ら(2021)は、友達関係を扱った論文の要旨の記述の分析から、「望ましい友達関係」の要素を「共有様式」、「自己開示」、「安心感」、「自己理解」、「自尊感情」、及び「親密性」に分類しているが、この分類と児童が考える理想の友達関係は、「自己開示」と「親密性」を除いて異なっていた。

このことから、「自己開示」と「親密性」は学術的にみても、児童の回答からみても、友達関係においては重要な要素であり、いかに親密で自己開示することができるかが、理想の友達関係構築の鍵となることが考えられる。また、戸梶ら(2021)が述べている望ましい友達関係と、要素が異なる点については、戸梶らが分析対象とした論文が、小学校から大学までを対象学年が幅広いため、小学5年生だけを対象とした本研究の結果とは違った形になったことが考えられる。

では、事前アンケート調査結果から見える児童の理想の友達関係の要素について一つずつ考察していく。まず、「仲の良さ」について、児童は漠然と友達との仲の良さを求めていると考えられる。落合・佐藤(1996)は、友達との付き合い方尺度に「誰でも仲良くしていきたいという付き合い方」の因子があることを示していることから、仲の良さは友達関係を構築する上で欠かせないものであることが示唆された。

次に、「ケンカの未然防止と修復」について、児童はケンカをそもそもしないこと、もしくはケンカをしたとしても、お互いの関係性を修復できることが重要と考えている可能性がある。構成要素の「ケンカ」についてどのような文脈で使われているのかをみると、「ケンカをしない」、「ケンカをしても仲直りできる」の大きく2通りの記述に分けられるため、児童はそれぞれの考え方により、理想の友達関係において、ケンカを否定する側とケンカを肯定する側

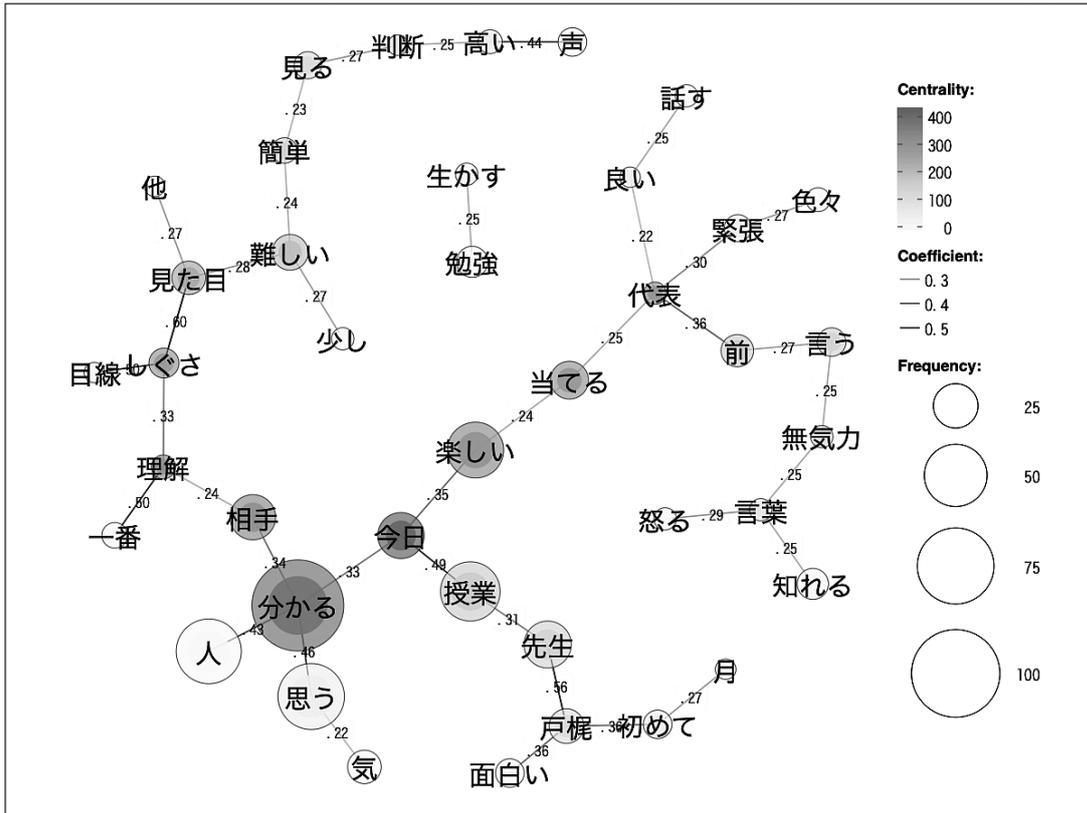


図2 第1回教育支援プログラム振り返りシートの共起ネットワーク図

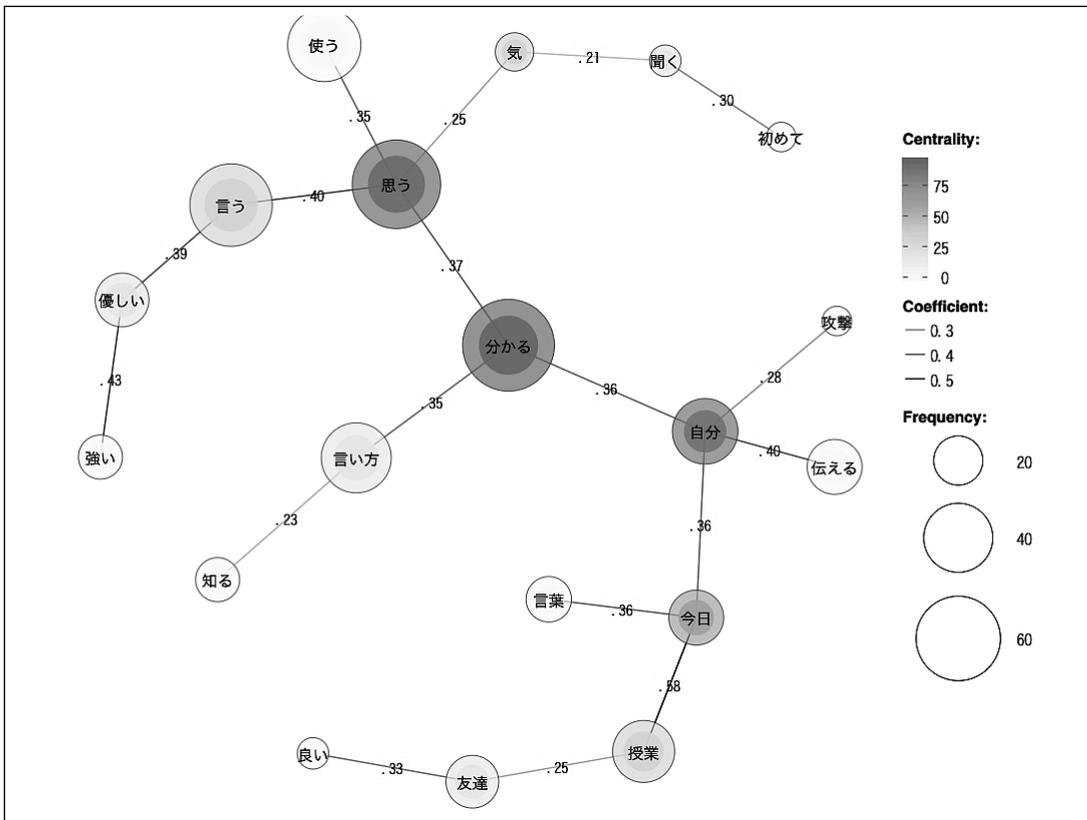


図3 第2回教育支援プログラム振り返りシートの共起ネットワーク図

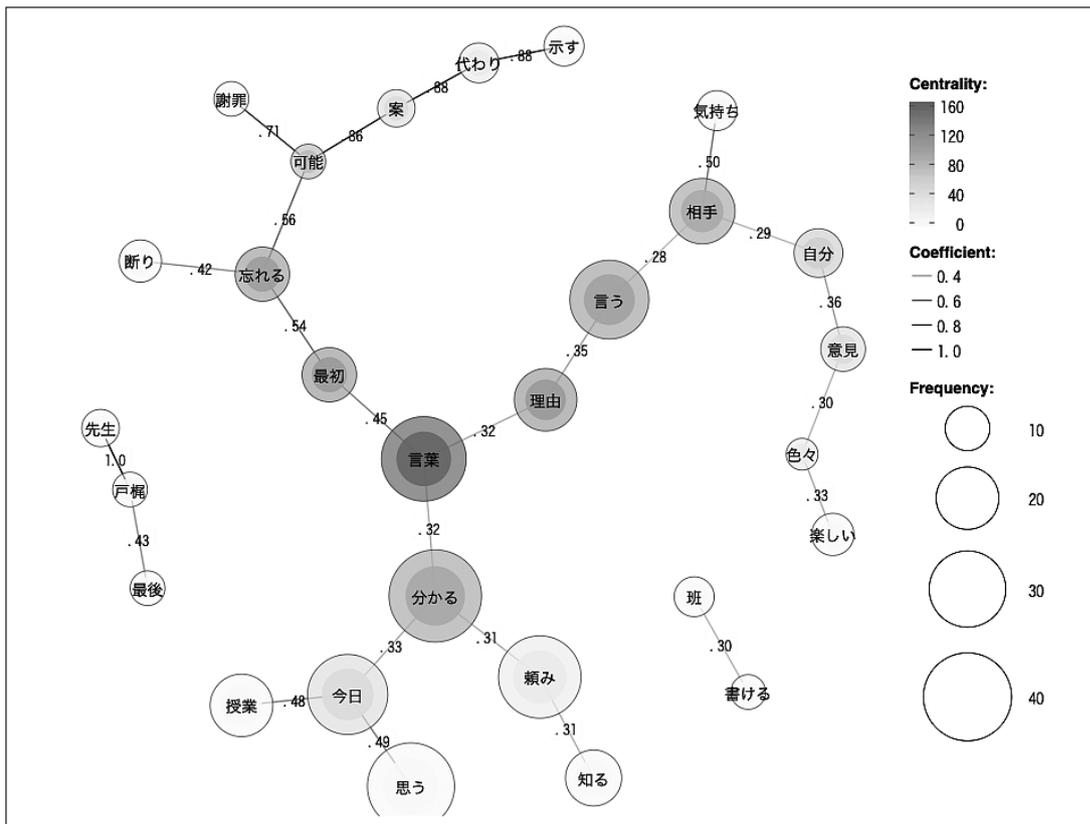


図4 第3回教育支援プログラム振り返りシートの共起ネットワーク図

に分かれていることが示唆された。

次に、「他者理解」について、児童は相手を理解することが重要であると考えている可能性がある。榎本 (1999) は、友人との活動的側面として、「相互理解活動」があることを示しており、このことから考えると、理想の友達関係においては、自分自身が友達を理解すること、また、理解できることは重要であることが示唆された。

次に、「協力・助け合い」について、児童はお互いに協力して助け合うことが重要であると考えている可能性がある。長沼・落合 (1998) は、友達との付き合い方において「励まし合う」付き合い方があることを示しており、このことから、理想の友達関係において、お互いに協力して助け合うなど、互恵性のある関係が重要であることが示唆された。

次に、「親密さ」について、児童は友達と親密な関係でいられることを求めている可能性がある。8歳半から12歳頃は、友達が親と同等かそれ以上に重要となり、同性同年輩の親密な一対一の友人関係が現れる (Sullivan, 1953) とされていることから、小学校高学年頃には友達との親密さが重要な要素となることが示唆された。

最後に、「相談・自己開示」について、児童はお互いに自身のことについて開示して相談し合うことが重要であると考えている可能性がある。長沼・落合 (1998) は、友達との付き合い方において、「傷ついても本音で付き合いおとうとする」付き合い方がある<sup>14)</sup>ことを示している。また、榎本 (1999) は、どの学校段階においても親しい友人関係とは、自分の意

見をはっきり伝え、一緒にいても自分の意志で行動し、友人を信頼して安定した関係であることを示しており、このようなことから、児童は友達を信頼して自身のことについて自己開示することを通して、相談し合える関係になることが重要であると考えていると推察された。

以上のことから、児童は「何でも言い合いながら助け合い、ケンカがあっても友達の気持ちを理解して親密な関係でいられること」を理想の友達関係と考えていることが示唆された。本研究を実施した時期はコロナ禍であったが、理想の友達関係に新型コロナウイルス感染症に関する記述はみられなかった。従って、コロナ禍であっても、児童の友達関係において求められていることは変わらないといえるだろう。しかし、現在の学校生活では、常時マスク着用、黙食での給食、ペアやグループ活動を取り入れた授業の制限、及び1メートル以上の間隔をあけた過ごし方など、これまでの学校生活とは違う過ごし方が求められる。そのため、これまで当たり前のように行っていた友達との関わりが制限されることで、これからの理想の友達関係の構築に影響を及ぼすことも考えられる。従って、たとえ児童が考える理想の友達関係が「何でも言い合いながら助け合い、ケンカがあっても友達の気持ちを理解して親密な関係でいられること」であったとしても、コロナ禍で求められる学校生活の過ごし方を踏まえた新たな友達関係の在り方が求められるかもしれない。

## 2. 教育支援プログラムについて

### (1) 第1回教育支援プログラム

振り返りシートの記述を共起ネットワーク図により分析した結果、「分かる」、「理解」、「しぐさ」、及び「見た目」などの語が中心的な語として抽出された。このことから、友達の気持ちが表情や身振り、口調、すなわち、ノンバーバルコミュニケーションの視点で読み取ることができるということについての知識理解を促進することができていると推察された。

### (2) 第2回教育支援プログラム

振り返りシートの記述を共起ネットワーク図により分析した結果、「分かる」、「思う」、及び「自分」などの語が中心的な語として抽出された。このことから、アイメッセージやユーメッセージの内容や構造についての知識理解を促進することができていると推察される。また、「自分」という語が中心的な語として抽出されていることから、相手の気持ちだけではなく、自分がどのような気持ちになるのか、また、その自分の気持ちをどのように相手に伝えるのかについて意識させることができていると考えられた。

### (3) 第3回教育支援プログラム

振り返りシートの記述を共起ネットワーク図により分析した結果、「言葉」、「分かる」、「理由」、「言う」、及び「相手」などの語が中心的な語として抽出された。このことから、素敵な頼み方や断り方におけるポイントについての知識理解を促進することができていると推察される。また、「相手」という語が中心的な語として抽出されていることから、友達に頼み事をする時や、友達の要望を断る際に、どのように頼めばよいのか、もしくは、どのように断れば相手の気持ちを考えた伝え方になるのかについて意識させることができていると考えられた。

### (4) 全教育支援プログラムについて

第1回、第2回、及び第3回すべての教育支援プログラムにおいては、各回で扱った内容について児童が理解し、自分の中で咀嚼できたと考える。このことから、学校の授業を通した介入を行うことで、友達関係を良好にするためのスキルについての知識理解を促進することができると推察された。そのためには、いかに授業時間を確保し、友達関係を良好にするための的確で時宜にかなったスキルを体験させ、児童自身の中に定着させていくかが重要となるだろう。

## 3. 今後の課題

### (1) 児童が考える理想の友達関係について

児童が考える理想の友達関係に関する課題としては以下の2点があげられた。

1点目は、実態把握の方法についてである。本研究では、児童が考える理想の友達関係を把握するために、自作した記述式のアンケートを実施したが、小学生は語彙力や文章力が十分に備わっていないことが懸念され、それにより記述式アンケートに記載した内容だけでは、児童自身が述べたい理想の友達関係像を十分に反映できていない可能性がある。

そのため、より精緻な実態把握をするために、個別面接を同時に行う必要性があげられた。個別面接を実施することで、児童自身の理想の友達関係がより具体化され、記述式アンケートのみの実施より正確に反映したものになるだろう。

2点目は、対象学年についてである。本研究では対象学年を5年生だけに絞って調査を行ったが、理想の友達関係については発達段階によって変化することが考えられるため、今後は学年ごとに理想の友達関係の実態把握を行い、学年間の変化を検討する必要性があげられた。

### (2) 教育支援プログラムについて

教育支援プログラムに関する課題としては以下の3点があげられた。

1点目は、解析方法についてである。本研究では、教育支援プログラムの効果については、プログラム実施後の振り返りシートの記述をテキストマイニングの手法を用いて質的に検討した。しかし、尺度を用いた数量的な検証をしていないため、児童の心理的な側面がどのように変化したかについて詳細に把握しづらい部分がある。分析した結果からも、教育支援プログラムで扱った内容についての知識理解を促進することができていることは読み取れたが、児童の心情の変化については十分に読み取ることができなかった。今後は開発した教育支援プログラムが、児童の心情にどのような影響を与えるのかも含めて、より客観的な尺度を用いて検討する必要性があげられた。

2点目は、教育支援プログラムで学んだことをどのように一般化していくかについてである。全3回の教育支援プログラムすべてにおいて、扱った内容の知識理解の促進には至ったと考えられるが、理想の友達関係を構築するためには、友達関係を良好にするためのスキルについての知識を理解するだけでは不十分であると考えられた。本プログラムを通して得た知識をどのように日常生活で実践し、知識を技能として定着させればよいのかを考える必要がある。また、その際、知識を技能として身につけ実践し、児童の友達関係がどのように変化したのか、それに応じて児童の心情にどのような影響を与えたのか、予後も含めてその効果を検証する必要性があげられた。

3点目は、コロナ禍での授業の実施についてである。全3回の教育支援プログラムはすべて新型コロナウイルス感染症予防の観点から踏まえて実施した。そのため、コロナ禍以前より活動を制限し、児童同士の協同的な学び合いの機会を少なくすることを余儀なくされた。友達関係に関するスキルを身につけさせるためには、友達同士の協働的な学び合いの機会をある程度保証する必要があると考えられるため、コロナ禍においては、いかに友達同士の協働的な学び合いの機会を作り、友達関係に関するスキルの向上を図っていくかが課題としてあげられた。

## 謝辞

本調査にご協力いただいた小学校の校長、教頭、

学級担任の先生方，そして回答いただいた小学生の皆様にご心よりお礼申し上げます。

## 文献

- 榎本淳子 (1999) : 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47, 180—190.
- 石川信一・佐藤寛・野村尚子・木谷村美香・河野順子・井上和臣・坂野雄二 (2012) : 不登校児童生徒における不登校行動維持メカニズムに関する検討—不登校機能アセスメント尺度適用の試み—. 認知療法研究, 5, 83—93.
- 春日井敏之・西山久子・森川澄男・栗原慎二・高野利雄 (2011) : やってみよう！ピア・サポート—ひと目でポイントがわかるピア・サポート実践集—. ほんの森出版.
- 国立開発研究法人国立成育医療研究センター (2021a) : コロナ×子どもアンケート第5回調査報告書.
- 国立開発研究法人国立成育医療研究センター (2021b) : コロナ×子どもアンケート第4回調査報告書.
- 森川澄男・菱田順子 (2002) : すぐ始められるピア・サポート指導案&シート集. ほんの森出版.
- 文部科学省 (2020) : 令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について.
- 中野武房・日野宜千・森川澄男 (2004) : 学校でのピア・サポートのすべて—理論・実践例・運営・トレーニング—. ほんの森出版.
- 長沼恭子・落合良行 (1998) : 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係. 青年心理学研究, 10, 35—47.
- 長根光男 (1991) : 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして—. 教育心理学研究, 39, 2, 182—185.
- 岡田倫代 (2017) : 5分10分30分でとにかく簡単ピア・サポート力がつくコミュニケーションワークブック. 学事出版.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996) : 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化. 教育心理学研究, 44, 1, 55—65.
- 齋藤朗宏 (2011) : 「日本におけるテキストマイニングの応用」『The Society for Economic Studies The University of Kitakyusyu Working Paper Series』No. 2011-12.
- Sullivan, H. S (1953) : 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 戸梶良輝・岡田倫代・古口高志 (2021) : 「望ましい友達関係」と「望ましくない友達関係」の要素について—論文タイトルと要旨のテキストマイニング分析から—. 高知大学学校教育研究, 3, 225—231.
- トレバー・コール (2003) : ピア・サポート実践マニュアル. 川島書店.